

論理的思考を育む表現指導

―話す・聞く能力と書く能力をともに育む学習活動を目指して―

一 はじめに

近年、国際化・情報化の進展や価値観の多様化など、人々の生活環境が急速に変化している中で、我々は、一人ひとりが主体的に考え、それぞれが直面する課題に柔軟に対応していくことが求められている。このような社会の変化にもない、国語教育において、「自分の考えをもつて論理的に意見を述べたり、相手の考えを尊重して話し合ったりすること」(『高等学校学習指導要領 国語表現』)が重視されるようになった。しかしながら私自身の実践を振り返ってみると、テキストに書かれている内容を理解させるだけの指導に重点をおき、文章の構成や展開を正確に把握する力、根拠を明確にしながら自分の考えや意見を述べる力の育成にはあまり時間をかけて来なかったと思う。

日々の学校生活において生徒達の会話を聞いてみると、いろいろな略語が使われていて驚かされる。また時に、話をしている者同士の会話が成立しているのか首を傾げなくなることがある。それは話し言葉の世界だけではなく、書き言葉の世界においても同様な傾向が見られることである。試験に向けての効率の良い単語の学習はする。ただし、日頃から本などを読んで言葉に慣れ親しんだり、順序立てて話をしようとするのがないため、文章を書く際にもうまく自分の気持ちを相手に伝えることが出来ずにいる。自国だけでなく、世界的規模で多くの人々とコミュニケーションを取らねばならない昨今であるのに、現状はなかなか難しい状況にある。だからこそ、生徒は話し合いを建設的に行ったり、文章を推敲し自己の考えを深めたり、テキストを読んで書かれている情報の信頼性を自ら検証したりすることができるようにならねばならない。そのような生徒を育てるためには論理的思考を高める指導の工夫・改善が今こそ必要であると考える。以上のことを踏まえて、本実践では他者の考えを的確に理解する能力、

〇〇〇立〇〇〇〇高等学校 〇〇〇〇〇〇 (国語科)

さらには論理的に文章によって自分の考えを表現する能力を育成する学習指導について考察する。指導方法の工夫・改善によって、主体的に考え、直面する課題に柔軟に対応していく生徒を育てるために、この授業実践を行った。

二 現状調査

(一) 本校生徒の状況

本校は百有余年の歴史ある学校である。生徒は勉学だけでなく課外活動に対する意欲も極めて高い。学校行事も生徒会を中心に生徒主体の運営がなされ、生徒は素直で落ち着いている。「文武両道」の精神は今も生きているが、反面、悠長に構えずに感じる感があり、生徒達は自らを律し、自己錬磨に励めばもっと伸びる資質を持っている。

国語の授業においても、学習意欲が高く知識欲もあるが、反面、思考が短絡的で、テキストから「解答」を探すことだけが「読解」だと勘違いしている生徒も少なくない。したがって、他者の主張の論理的な組み立てを的確にとらえようとしたり、論拠を明確にし論理的に「自分の意見」を組み立てて表現したりすることは苦手である。自分の言葉で考え表現する機会が、これまでの授業でそれほど多くなかったこともその理由の一つである。

(二) デイベートおよび小論文についての実態調査

【対象生徒】平成十八年度一学年 三クラス

【実施時期】平成十八年度五月

【アンケート結果 回答数11】

ア 「ディベート」をやってみたことがありますか。

・ やったことがあります (13・2%)

・ やったことはないが知っている (60・5%)

・ 全然知らない (27・3%)

イ 「小論文」を書いてみたことがありますか。

また「作文」との違いは分かりますか。

・ 書いてみたことがあります (37・2%)

・ 書いてみたことはないが知っている (51・2%)

・ よく分からない (11・6%)

ウ 「小論文」の書き方にはどのような方法があるか知っていますか。

・ いくつか知っている (22・0%)

・ 一つ知っている (54・7%)

・ よく分からない (23・3%)

アンケートの結果を見ると、ディベート未経験者が八割を超える数となつてゐる。そこで、まず「ディベート」とは、どのようなものであるのか、その目的や実施方法などを生徒に示し、これからの学習活動においてディベートを用い、他者の主張を的確にとらえたり、自分の意見を理論的に組み立て、効果的に表現する能力を養つたりといった単元目標を生徒に知らせる。

ディベートは、自分と異なる意見の「他者」を論駁することを目的としているために、生徒に「他者」を意識させやすい。生徒は相手チームがどのような質問や反論をしてくるのかを想定しなければならないので、知らず知らずのうちに「他者」を意識しながら物事を考えるようになる。さらにディベートには、伝達行為における実践的な「立論」「質疑」「反駁」という「型」があり、「他者の主張」に対し「自分の主張」を論理的に組み立てる訓練を効果的に行えることは言つまでもない。

通常、ディベート討論はチーム制で行われる。(四十人クラスであるな

らば、一チーム十人の四チーム。)チーム制での利点は、集団であるが故に個々に応じて役割分担ができることであり、相互に相談することが可能なことにある。だが時として、発言するのは特定の生徒に偏りやすく、ディベートに積極的に参加しなくても事足りてしまう状況も想定される。また、ディベート未経験者の割合なども考慮すると、生徒の実態調査を踏まえ、より濃密な内容のあるディベートにする工夫が必要となる。

また、この実態調査で「小論文」についても未経験者が六割強、いることもわかつた。しかし、小論文を経験している者でも、書く能力の向上を目指した指導を受けた経験はほとんどない。そこで、本実践では、ディベートで得た「相手の主張を的確にとらえる」・「論拠を明確にし、自分の意見を論理的に組み立てる」・「資料を活用する」といった力を、資料や課題文を読み自分の意見を展開する形で小論文を書くことに応用する。資料を的確に読み取つたり、相手の主張を的確にとらえたりした上で、ある程度まとまつた長さの自己主張を展開できるようにしたい。

三 研究方法

(一) 研究の流れ

本研究の流れは次のようになる。

生徒の実態調査	分析	仮説設定	授業実践	実践分析
アンケート調査	仮説検証			

(二) 仮説

ディベートから、資料や「他者の主張」を読み取り、小論文を書くといった一連の学習活動を段階的に実施することで、生徒達は他者の主張を的確にとらえ、それに対する自分の主張を論理的に組み立て表現することができるようになる。また、この一連の学習活動により生徒達は、「話す・聞く能力」「読む能力」・「書く能力」がバランスよく身につく、伝え合う力の向上が期待できる。

(三) 学習指導計画

平成 1 9 年 度				平成 1 8 年 度		実施時期	実践内容	実践目的	評価の観点	主な評価規準
十月 一時間 実施	六月 一時間 実施	六月 一時間 実施	五月 一時間 実施	十一月 三時間 実施	六月 三時間 実施					
「小論文指導 朝日新聞より」 (実践)	「山月記 小論文指導」 (実践)	「『山月記』の読解をもとにした班別の討論会」(実践)	「論理的に自分の意見を構成するために」(実践)	「ディベート演習」(実践)	「二人組による対話型のディベート」(予備実践)					
・資料を読み取り、自己の主張を論理的に組み立てる。	・ディベートにおける「論述の型」を利用し論理的な構成の小論文を書く。	・様々な意見を的確にとらえそれらを考慮した意見を論理的に構成して述べる。	・ディベートを踏まえ、論理的な構成に必要な基本的な事柄を確認する。	・他者の主張を的確にとらえ、自己の主張を論理的に展開する。	・ディベートの目的や実施方法などを知る。 ・対話型ディベートで論理的な意見交換に慣れる。					
・「関心・意欲・態度」 ・「読む能力」 ・「書く能力」	・「関心・意欲・態度」 ・「読む能力」 ・「書く能力」	・「関心・意欲・態度」 ・「話す・聞く能力」 ・「読む能力」	・「関心・意欲・態度」 ・「知識・理解」	・「関心・意欲・態度」 ・「話す・聞く能力」	・「関心・意欲・態度」 ・「話す・聞く能力」					
・資料内容を読み取り、小論文の論拠として検討・整理できたか。 ・論述の型を応用した小論文が書けたか。	・論述の型に従って主張を展開したか。 ・論拠の検討がなされているか。 ・適切な自己評価が行えたか。	・自分の主張の論拠となる事柄を複数あげて、様々な角度から検証できたか。 ・多様な論拠から出される多様な意見に対し、それらを的確にとらえているか。	・自分の主張の論拠となる事柄を様々な検証することができたか。 ・複数の論拠を挙げ、自分の主張をしっかりとしたものにする工夫ができたか。	・班での討議に意欲的に参加したか。 ・相手の主張を的確にとらえたか。 ・自分の主張を論理的に組み立てられたか。	・テーマに関する情報を選択し活用したか。 ・相手の主張を的確にとらえたか。 ・自分の主張を論理的に組み立てられたか。 ・相手の主張を考慮した主張をしたか。					

四 授業実践

(一) 予備実践 「二人組による対話型ディベート」

【対象】平成十八年度一学年 普通科一年 組 名

【時期】平成十八年度六月

ア 単元の目標

テーマにそって「肯定・否定」の立場で、自分の考えを述べる。
相手の主張に耳を傾け、よく理解した上で、反論する材料を揃える。
相互にそれぞれの考えを深め合う。

イ 授業の流れ(三時間)

《第一時》ディベートについてのオリエンテーション

・ ディベートとは(二十分)

・ ビデオ「ディベート甲子園」(全国教室ディベート連盟)による模範ディベート(三十分)

《第二時》テーマの提示「大学進学は必要であるか、否か」

・ 事前準備・話し合いの進め方の指導

《第三時》対話型ディベート準備

・ 主張の骨組みとなる論点の決定

・ 討論後、生徒に評価させる。アンケートの実施

ウ 授業実践に当たつての留意点

ディベートとは何か、及びどのように実践したらいいのかをまずビデオによって指導した。

その後、無作為に二人組を作らせ、ディベートの前段階としての「二人組ディベート」を実践した。本校生徒は、授業で自分の意見を述べる程度ならば得意であるが、ディベートとして内容のある討論が行われることまでは期待できない。論ずべきテーマに対して自分の主張を支える有効な資料を探し出し、論理構成を考えることや、他者の反応を意識した展開とな

ると、きわめて難しい課題である。

そこで、実際にまず二人組でテーマに沿つての「対話」を設定した。

実践にあつて、次の事柄に留意した。

テーマを事前に発表し、立論の準備をさせること。

(資料の検討時には適宜授業者がアドバイスをした)

対話シート(資料)を準備し、相手の主張と自分の主張を整理させること。

評価については、対話シートをもとにした授業者の評価と自己評価票を使った生徒の自己評価で行うこと。

エ 授業の様子と評価の実際

二人組による対話型ディベートは和やかな雰囲気の中でおこなわれた。始めに簡単な自己紹介をし、その後「大学進学は必要であるか、否か」というテーマについて話し合った。対話シート(資料)に基づいて、「立論」「質疑」「反駁」の型を意識させ、まずは相手の意見への理解、反論、そしてどうやって相手の意見を踏まえながら自分の意見を相手に納得させるか、など意識しながら話をさせた。疑問に思う点はすぐにその場で質問させ、自他の考え方の違い、そしてなぜそのように考えるのかを相互に確認した。問答を繰り返していくと、次第にクラス全体が活気づいていくのがよく分かった。

ディベート後、次の方法で評価を行った。

1 対話シート(資料)による評価と机間指導による観察評価

対話シートから相手の主張を的確にとらえ自分の主張に反映させることができたか、また資料を活用し自分の主張を論理的に構成できたかを評価した。生徒たちの活動状況が把握でき、戸惑いながらもみな学習目標を達成したことが分かる。

2 自己評価票(資料)を用いた生徒の自己評価

この自己評価では、生徒たちの学習に対する「関心・意欲・態度」を評価した。自己評価の結果では、問 において「よくできた」を選んだ生徒が七割強いたが、生徒たちが学習目標を達成したことが分かる。

才 反省・課題

ディベートを実施するにあたり、自分の主張の論理的構成や他者の主張を的確にとらえるといった重要事項を演習形式で学習させた。結果については評価に示した通り、ほぼ、その学習目的を達成した。また引き続き、本実践のディベートにも応用できることがわかった。しかしその反面、生徒たちに資料を調べさせ、活用できるように促すことが十分にできず、次の実践に向けた課題が残った。

(資料) 対話シート

対話シート 月 日 (話者:)
 テーマ《 大学進学は必要であるか、否か 》
 (肯定) (否定)

「立論」(自分の意見を述べてみよう。但し、根拠も述べられるようにしておくこと！)
 大学に進学した方が「自分の視野を広げることができ、夢に近づくためにも有利なことが多いと思う。

「質疑」(相手の意見で、疑問に感じるところをまとめてみよう。もしくは相手に質問されたら。)
 大学に通わなくても、自分のしたいことをし続けて夢が叶えられる可能性もあるのではないかな？

「反駁」(相手の意見に反論してみよう。無論、根拠も述べられるようにしておくこと！)
 確かに、大学に行かなくても夢が叶うこともあるかもしれない。しかしそれは限界があると思うので、大学を専門的に学んだ方がいいと思う。

「最終弁論」(結論としてあなたははどう思うのか。)
 大学進学は必要であると思う。

※ 主語を明確に。意見と事実をきちんと分けること。

(資料)

自己評価票 A (ディベート) (組) ()

テーマに対し、必要かつ重要な情報を収集することができたか。
 相手の主張を正確に聞き取り把握することができたか。
 論拠を示しながら自分の意見を伝達することができたか。
 敢えて異なる立場に立って、相手の言い分を取り入れながら
 自己の考えを主張できたか。

A 〃よくできた B 〃普通 C 〃やや劣る
 D 〃できなかった

今回の二人組ディベートをやってみてどうだったか、感想を述べてください。

自己評価票 A 〃 における生徒の感想

- みんなの前で話すのは苦手だが、友達と二人だと案外面白い。
- 随分、自分以外の人と違ったものの方を見方していることに気がつかされた。もう少し調べる時間が欲しい。
- ディベートは難しいと思うっていたけれど、ワークシートにあてはめて考えてみると、テーマに対する自分の考えがより深まっていたのを感じられた。

(一) 実践 「ディベート演習」

【対象】平成十八年度一学年 普通科一年 組 名

【時期】平成十八年度十一月

【教材】「相手の立場や考えを尊重して話す」

(使用教科書 大修館書店 『国語総合』)

ディベートの演習を目的とし、一班十人程度で四班に分かれ、「十八歳は大人か、否か」というテーマ討論を実施した。事前準備として、司会・時計・審判担当者各二名を班内で分担させた。討論における「立論」「質疑」「反駁」「最終弁論」はそれぞれ二分以内とした上で、「ディベートの型」の理解を徹底させ、一時間配当で二回の対戦を行った。なお、事前準備では、司会と時計担当者は進行の面からディベートの型を確認し、審判担当者は各班の主張を予想して判定の仕方を考えるなど、係りごとの活動を計画した。

ア 単元の目標

資料を活用し、自分たちの主張をより効果的に伝える。

相手の主張を的確にとらえ、反論する。

班のメンバー全員で有効な話し合いをする。

イ 授業の流れ

・ 討論準備として、資料 の準備シートを班員各自で記入し、各班ごとに協議させる。

・ 肯定・否定の立場に分かれて各班、立論原稿を完成させ討論準備をする。各班、作戦会議を開く。

・ ディベート演習を行う。演習終了後、アンケート票による評価

ウ 授業にあたっての留意点

この実践 は本格的なディベートであるので、次の事柄に留意させた。

「司会進行マニュアル」(資料)を事前に配布し、討論の円滑な進行を心がげること。

班別での学習であるため「準備シート」を用意し、班単位での話し合

い・検討・立論が円滑に行えるようにすること。
評価については、準備シート・自己評価票・討論で行うこと。

(資料) 準備シート 抜粋

事前準備シート No. 1

テーマ : 18歳は大人か否か

＜どちらかに○＞ 肯定派 否定派

○はリーダー

メンバー					
------	--	--	--	--	--

主張の骨組となる論点(多めに挙げて、来週2点程度に絞る)

① アメリカやヨーロッパ諸国などでは、成人として扱われてきたから、

② 身体的にも精神的にも大人として扱っても良いのではないが、

③ 家族のために就職し、給料を受け取る者がいるから、

④ 結婚をして成人として扱われるから

⑤ 就職し、家族を養っている⇒ 経済・社会的にも大人として扱ってよいのではないが

⑥ 既に義務教育、高等教育を終えている者もいるから、

か

(資料) 司会進行マニュアル 抜粋

司会進行マニュアル

今日司会を務める○○です。今日の討論がうまく進められますよう、皆さんご協力ください。その他の役割分担と仕事を確認します。時計係は○○さんです。残り時間をカードで示します。審判は○○君と○○さんです。最後に、判定と講評を述べてもらいます。よろしくお願いします。

まずここで、この討論のルールを確認しておきます。

1. 立論・最終弁論は中央の演説台で行う。反対尋問・回答は拳手をし、指名されたらその場に起立して発言する。
2. 発言は制限時間を超えない。司会者に打ち切られたら、すぐにやめる。
3. 言葉遣いは丁寧にする。やじ・揚げ足取り・中傷はしてはならない。
4. 相手の発言を妨げはならない。
5. 最終弁論では、新しい論点・論拠を加えてはならない。

以上のルールに違反し、司会者から2回以上注意を受けた場合は減点します。

それでは討論を開始します。今回のディベートは、「○○○○は○○○○である」をテーマに行います。それではまず肯定派の方から、立論を2分以内でお願いします。発言は中央の演説台で行ってください。

肯定派立論

ありがとうございました。それでは否定派の人、立論を2分以内でお願いします。

否定派立論

ありがとうございます。続いて反対尋問に移ります。その前に2分間の作戦タイムを設けます。反対尋問の制限時間は2分間です。作戦タイム終了後、否定派から行います。では両派作戦を立ててください。

工 授業の様子と評価の実際

授業では、各班一回ずつ対戦し、一時間で計二回の対戦を実施した。「立論」「質疑」「反駁」「最終弁論」の四パートについて、肯定側・否定側とも持ち時間各二分、パート間の準備時間は設定していない。この準備時間を設定しなかった理由は、班内の一部の生徒の主張だけで論戦の結果が左右されることを防ぐためである。生徒には事前にこの趣旨を告げ、「質疑」「反駁」のパートでは、積極的に発言するよう促した。判定は、対戦している二班の審判担当の者の合議によるものとした。対戦していない二班は傍聴とした。展開ばかりでなく、予め分担任しておいた各担当の役割なども客観的に確認させたかったためである。特に、判定では、対戦していない班員全員で判定することも考えたが、判定結果とその論拠のまとめに時間がかかることを考慮し、今回は採用しなかった。

実際の展開は、思った以上に円滑であったが、論理的なやり取りにやはり不十分なものを感じた。展開例を挙げると、肯定派の骨子は「十八歳は経済的にも、社会的にも責任能力が認められてよい年齢」というものであり、否定派は「納税義務や選挙権がないため、社会参加は難しく、精神的にも未熟な年齢」という位置づけであった。

これに対し、「質疑」では、「精神的に未熟というのは何をもって判断するのか（肯定派）など、両派とも様々な質問が出たが、応答の論拠がいずれも弱かった。従って、「反駁」でも緊張感はあるものの、相手の質問を論理的に切り返すような反駁は難しかった。

ディベート後、次の方法で評価を行った。

1 自己評価票B（形式はAと同様 掲載略）を用いた生徒の自己評価

この自己評価は、前回の予備実践同様「関心・意欲・態度」の観点で評価した。自己評価票も前回に準じたが、次の二点が異なっている。

感情的にならず、皆に聞き取りやすい声で話すことができたか。ディベートをやる前と後では自分自身に何か変化があったか。

また、各係りを分担任したものは、自己評価票にその旨を書き、自分の分担任について、取り組み方を反省させたり、自分の班のディベートを客観的に評価させたりした。

自己評価票 B における生徒の意見

ディベートに慣れてきた。反論の時間をもっと上手く活用して相手の論理を崩したかった。惜しかった。
今まで自分の考えを順序立てて、整理して相手に伝えるなんて考えもしなかったが、大切なことが解った。
いつの間にか相手の言い分を分析している自分に驚いた。

アンケートの結果では、問 〃 において大方の生徒が「よくできた」を選んでいった。だいぶディベートに慣れてきているのが窺える。問 の生徒の意見では特筆すべき点があった。「自分の考えを順序立てて」や「相手の言い分を分析している」点がそれにあたるが、明らかにディベートを通じて個々の成長があるということである。

2 班別活動の評価

班別活動の評価は、準備段階の話し合いの様子なども含め「話す・聞く能力」の観点で評価した実際のディベートの評価は、生徒の自己評価票の 〃 の項目を評価規準として（教師・授業者）が行った。班別活動の評価は、係りを分担任した者も含め、班員全員を同じ評価で扱った。しかし、各係りを分担任した者の評価については、その取り組みについての確かな評価をする工夫を今後の課題として研究する必要があると思つた。なお、準備シートについては、自己評価票同様「関心・意欲・態度」の観点で評価した。

オ 課題・反省

クラス単位でのディベートをした経験者がほとんどいない状況での実践であったが、評価結果を考へても概ね成功したといえる。ただ一点、気がかりであったのが、自分の主張を支える根拠を様々な角度から検証したり、複数の根拠を上げて、論理的構成を一層確かなものにするなどの基本的な部分での工夫が不十分であったことである。この点は自分の主張を論理的に構成するための最も基本的な作業であると考えるので次の学習活動の中心的課題として取り上げる。

(三) 実践 「論理的に自分の意見を構成するために」

【対象】平成十九年度二学年 普通科二年 組 名

【時期】平成十九年度五月

【教材】「書き手の考え方やその展開の仕方について自分の意見を書く」

(使用教科書 大修館書店 『現代文』)

ア 単元の目標

結論と論拠のつながりを確固たるものにする工夫に気づく。

イ 授業の流れ(一時間)

- ・ ワークシート(資料 抜粋)の配布と本時の目標・評価の説明。
- ・ ワークシートを使い、結論に対する論拠を様々に検討する。
- ・ 班ごとに、結論と論拠のつながりを確固たるものにするための工夫についての意見を集約し、発表する。

ウ 授業にあたっての留意点

昨年度のデイベート授業実践で十分に達成できなかった点について、改めて取り組み補足することを試みる実践である。自分の主張を論理的に構成するにあたり、結論とそれを支える論拠とのつながりは多様で、確固たるものでなければならず、様々な角度から検証されるべきものである。この結論と論拠のつながりを強固にするための工夫を生徒自身に行わせることを目的にこの単元を設定した。

したがって、次の事柄に留意させる。

- ・ ワークシートを使って結論と論拠のつながりを確固たるものにするための工夫に気づかせること。
- ・ ワークシートを正しく使わせること。
- ・ ワークシートには八つの、ある事柄に関する「結論と論拠」が載せてある。(資料 ①) いずれも、論拠から結論に至る根拠付けが不十分であり、論拠を様々な角度から再検討させ、結論に至る、より具体的な必要条件を考えさせることを目的としている。自分の意見を論理的に相手に伝えるにはどうすればいいのか、説得力ある根拠づけは どうすればできるのか、多面的に物事を生徒自身が

捉えられるよう、考えたことを書き込むように指示する。

エ 評価の実際

- ・ 主張と論拠のつながりを確固たるものにするものについてワークシートの具体例と照らしあわせてまとめているかを、関心・意欲・態度」の観点で評価した。それに対して生徒からは次のような意見が出た。
- ・ 論拠から結論を導き出すには論拠自体が正しいこと、また論拠に不足がないことが大切なこと。
- ・ 事実と意見の区別をつけること。
- ・ 論拠部分をまずは疑ってみること。否定してみることに。
- ・ 論拠と結論の関連性が適切でなければ、説得力に欠けること。
- ・ などがあげられ、生徒たちは学習目標を達成したと評価できる。

(資料⑤) ワークシート

次の「論拠↓結論」において説得力を持たせるために、どのような根拠づけをしますか。そのための言葉や条件を前提部分に書き加えてみましょう。

① 消費税率を上げると国民が反対している

税金を上げるべきではない

② 学期末の国語の試験は満点だった

国語の成績は「5」だ。

(以下省略)

(四) 実践 『山月記』の読解をもとにした班別討論会

【対象】平成十九年度二学年 普通科 組 名
 【時期】平成十九年度六月

ア 単元の目標

ワークシート(資料)を用いて自分の意見を論理的に構成する。

イ 授業の流れ(二時間)

- ・李徴が虎になった理由とは何か」について、各自がワークシートを活用して考え、自説をまとめる。
- ・クラスの生徒を四班に分け、討論をし、班ごとに意見交換をする。
- ・実践終了後、自己評価票Bを用いて生徒は反省評価する。

ウ 授業にあたっての留意点

この授業実践は、実践を発展的に展開したものである。生徒自身が、結論と論拠のつながりを確認するものにするために、どのような説得力ある根拠づけができたかが最も重要な点である。また、ディベートの体験を踏まえ、他者の意見を的確にとらえ、自分の意見に反映させることも重要であるが、ディベートのように賛否・可否等の対立項のどちらか一方の立場で意見を展開するわけではない。生徒たちは様々な論拠で多様な意見が出される中、それらの意見を考慮に入れて自分の意見を主張しなければならぬ。

そこで、次の事柄に留意させる。
 「李徴が虎になった理由とは何か」というテーマに対する自分の考えをまとめ、その論拠をより確かなものにするため、ワークシートを使い、自分の考えと論拠のつながりを十分検討すること。小説の読解の深さではなく、ワークシートにあげられたそれぞれの考えとその論拠のつながり方の確かさを、評価規準として評価される旨を事前に知らせておくこと。
 各班で集約した意見についても同様の評価規準で班員全員に同じ評価を与えることも事前に知らせておくこと。

(資料⑥) ワークシート

李徴が虎になった理由を考える		
・戸口ぞ我が名を呼んだと云ふか ・運命という不条理	理由もわからず押しつけられ 理由もわからず生きていく 生き物のため	芸術家の魂 芸術家にならなければ普通であらう ならない。 常人の域を超越して発狂した 状態に達した時に真の芸術家 になれる。
「尊大」と「自尊心」 「臆病」と「羞恥心」がよじれた 状態。 「優越感」と「劣等感」 いわゆる統合失調 若い頃の傲慢な性格。己の詩業への絶望	臆病な自尊心と 尊大な羞恥心のため	相反する二つの意識は人間誰 しも持つもの。別に李徴に限 られたものではない。
人間性がないから獣に身を 落とす。	妻子のこじこり詩業 の方に気にかけていた から	・多分に人間らし過ぎた。 芸術家の魂に護られながらも 臆病な自尊心により詩人に なりきれなかった李徴。甘さ 芸術家のためには妻子に対する 世の非情さを対人関係を気にしない 傲慢さが必要。

エ 評価の実際

「李徴が虎になった理由とは何か」について自分の意見とワークシートに書かれた論拠が強い説得力を得られるようにしっかりと結びつけられ、検証は十分されているか、を「読む能力」の観点からワーク

シートにより個人評価し、各班でまとめた意見については「話す・聞く能力」で評価し、班員全員に同じ評価を与えた。また、実践終了後の自己評価票により、生徒の自己評価を「関心・意欲・態度」の観点で評価した。自己評価票の、問、の結果では、全般において「よくできた」を選んだ生徒がかなりいた。相手の意見・考えに耳を傾け、同時に自分の意見の論拠もよく検討したうえで、書いていた。ディベートからの一連の学習活動を通して、各単元の学習内容について理解を示し、論理的な考え方が生徒達の身についてきたと思っっている。

自己評価票 B- (但し、今回は「感想を述べよ。」という問いかけにした) における生徒の意見

- ・物の見方を変えるといろいろなものが見えてくることに気がついた。
- ・言葉をつけ足したり変えたりすることでこんなに納得の度合いが高まることを実感した。
- ・論理的に考えることが難しかった。でも面白い。
- ・論理性を高めていくと自分の意見が明確に相手に伝わるようになった。

オ 今後の展開

ディベートから討論会に至るまでの一連の学習活動で、生徒達は自分の意見を論理的に組み立てることを学んだ。

次の段階としては、このディベートの実践的な「型」を小論文に取り入れ、さらにその型を応用して多様な論拠から自分の意見を論理的に構成するような小論文に進めて、「書く能力」の向上と絡めた指導を展開したいと考えた。

(五) 実践 「山月記 小論文指導」

【対象】平成十九年度二学年 普通科 組 名

【時期】平成十九年度六月

【教材】『山月記』(使用教科書 大修館書店 『現代文』)

ディベートをはじめとする一連の学習活動において、生徒たちが習得してきた論理的構成力を小論文に取り組むことで、より確実に定着させることをねらいとしている。具体的な学習活動としては、「ディベート」を通じて学び得た「論述の型」を応用し、型に従って論述を展開することで論理的な構成を持つ小論文を書くことを目指す。また、主張の論理性を一層高めるため、主張を支える論拠を必要に応じて様々に検討するといった基本的な作業も繰り返し行うことも指導した。なお、「ここでいう「論述の型」とは次のような構成を指す。

ディベートの型を対応させた「論述の型」

・ 意思表示 (自分は〜と考える。)	∴	「立論」
・ 意見提示 (確かに〜しかし〜)	∴	「反駁」
・ 根拠 (なぜなら〜)	∴	「質疑」
・ 結論 (以上のことを踏まえて)	∴	「最終弁論」

ア 単元の目標

ディベートの型を利用した小論文を書くことで、自分の主張を論理的に構成する方法を確認する。

イ 授業の流れ (二時間)

- ・ 「山月記」の討論会で使用した資料を参考にして「李徴の作品が『第一流の作品になるのに欠けている微妙な点』とは人間性であるか、否か。」を、どちらか一方の立場で考え、小論文を書く。
- ・ 自己評価票による自己評価及び任意の二人組で相互評価する。

ウ 評価規準・評価の観点と評価の実際

- ・ 小論文の評価と評価の実際
- ・ 「論述の型に従って主張が展開されているか」「書く能力」
- ・ 「論拠について検討がなされているか」「読む能力」
- ・ 自己評価・相互評価 (ともに「関心・意欲・態度」の観点)
- ・ 自己評価票 C (資料) の規準で自己評価を行った。

(六) 実践 「小論文指導 朝日新聞より」

【対象】平成十九年度二学年 普通科 組 名

【時期】平成十九年度十月

【教材】「全国学力調査結果」 朝日新聞 十月二十五日 十二版
「都道府県別の平均正答率」の表

ア 単元の目標

資料を読み取り、自分の主張を支える論拠を様々な角度から検討し、論理的な構成をもつ小論文を書く。

イ 授業の流れ(二時間)

・「全国学力調査結果」を見て、内容を読み取り、小論文を書く。
・自己評価票Cの規準による自己評価及び任意の二人組で相互評価する。(自己評価・相互評価は「関心・意欲・態度」の観点で評価する。)

ウ 評価規準・評価の観点

「全国学力調査結果」を見て、読み取れる内容を検討・整理できたか。「読む能力」
資料から読み取ったものの論拠をとり、論述の型を応用した自分の構成で論理的な小論文が書けたか。「書く能力」

エ 評価の実際

一連の学習活動を経た後の実践であったため、前項ウでは、自己評価において高い評価がつき、生徒は論理性の高い主張ができるようになったと考えられる。しかし、ウについては、論拠となる部分の検討が、言語資料ではないものの読み取りであったため、かなり難度が高かった。

自己評価票 C-1 における生徒の意見

・すぐ難しくかった。

・解説を聞いてなる程と思った。世の中何が正しくて、何がそうで

ないのか見分けないとまずいと思った。
・論理的に書くことの方法論はさほど難しくはないが、その書き方とする中身の選択が難しいと思う。

五 検証

決して「国語」という教科は嫌いではないのに、他者の主張の論理的な組み立てを的確にとらえようとして、論拠を明確にし論理的に「自分の意見」を組み立てて表現したりすることは苦手だと感じてる生徒は多い。今回の試みは、そのような事柄を何とか克服できないものかということが始まった。「話す・聞く能力」「読む能力」「書く能力」がバランスよく身につく、伝え合う力の向上も期待できる学習法としてディベートと小論文との段階的併用を考えた。それぞれの学習活動の評価を総合的に考えると、一連の実践は、生徒の論理的な思考を育むのに、有効であったと考えられる。生徒たちは、ディベートにおいて、「他者の主張を的確にとらえること」・「他者の主張を踏まえ、自分の主張を論理的に構成すること」が、自分の考えを伝えるときに重要なことに気づき、その工夫に取組むことができたと思う。さらに、その成果を小論文で確認、応用することで、一層の定着が図れたものと考えている。

六 おわりに

早いもので、研究員になってもうすぐ二年の年月が流れる。日々、時間に追われ、慌ただしい毎日を過ごしている。だが、今回の研究では「国語」という教科に関しては勿論のこと、それ以外にも多くのことを学んだ。特に、自分がいかに多くの人に支えてもらっているかということである。自分が学んだことをこれからさらに生徒達に還元していきたいと思う。

最後になりましたが、このような研究の機会を与えていただきましたことに深く感謝致しますとともに、今回の研究に際し、温かい御指導と貴重な御助言を賜りました指導主事の 先生、
事の 先生、教科指導員の 先生、
先生の 先生、教科指導員の先生方、県立 先生、前教科指導員の 先生、教科研究員の先生方、県立 先生、前指導主事の 先生、教科指導員の先生方、
この場を借りて心よりお礼を申し上げます。 高等学校の先生方に

